

社会には基本があります。数字は〇(ゼロ)から始まり、言葉はA(あ)から始まり、仏教も阿(あ)から始まり、キリスト教もアダムとイブから始まっていると思います。イスラム教はアッラーフです。天と地・東西南北・等々と変える事の出来ない事柄がたくさんあります。

以前にも、お話し致しましたが、主人はその家の長、主婦はその家を守る主たる婦人。主婦を働かせるに出して、果たして家庭を守れるのか自分は考えさせられます。ましてや小さな子供を預けてまで働かざるを得ないとすれば、何処かに不足が生じて不思議では無いと思います。仏教も浄土教以前においては何事も自己の責任に依拠して、自分が全ての責任を果していく教えでありました。大乘仏教の浄土教が広まりますと、慈悲即ち、他力により助けて頂ける思想にかわってきました。当然、善悪についても子孫が継承していく事になります。「親の因果が子に報い」とか「積善の家に必ず余慶あり」と言はれる様になりました。後に、親鸞聖人が称えた「悪人正機説」よれば、悪いことをしても、阿弥陀仏を帰依(信じる)すれば浄土(極楽)に往生させて頂けるといふ思想です。私はどちらからかと言いますと、全部他力で事足りると言う事になりますと、相当寛容な人しか生活できません。思想・責任を放棄する事は社会の秩序を破ることになりかねません。戦も容認せざるをえません。思想・哲学に倫理を加えて、現実社会の徳育をしなければなりません。何でも主張有りきでは自己中に成りかねません。盤珪禪師の「うすひき歌」に「我と作りし心の鬼が、責めて苦しむ身のとが(咎)を、悪を作れば心が鬼じゃ、外に地獄は無きものを、地獄ざらいの極楽ずき(好き)で、楽な世界に苦をうけた・・・」と又、冗談もすぎると信用を失うとも、物を贈るのに上げ底はいけないとか、日常の無礼にも注意をされたそうです。心のあり方が人格を形成するとの教えであったと思います。心が体を動かしてしまいます。故に、心次第で善悪に分かれると言うことです。心掛は簡単なようで難しいことです。平重衡に焼かれた東大寺の再興に尽力した重源は「ただひたすらに作善に励み給え」と、自分のステイタスとして「私には、私を大切にしてくれる人たちがいる。私には、私を導いてくれた先師たちがいる。私は、父・母の二恩を忘れたことはない。私は、兄弟と友の恩を忘れたこともない」と報恩感謝の生活をされたようです。恩を受けた事を忘れず、世の中に自分でできる範囲内で、お返しをする事が出来ればなによりではないか。重源の一生は、思い途上だったと言えます、不屈の精神力と肉体で一途に歩き続けた俊乗房重源は八十六歳を一期として遷化(死亡)されました。

平安安時代から始まったと言われる、彼岸の先祖供養を二十二日勤修いたします。ご先祖様が満足されます様に、しっかり施餓鬼会を勤めたいと思います。道中気を付けて、お越してください。因みに「なんで」という様な事態が起きれば先祖が原因の場合あり。九月に亡くなられた著名人には竹久夢二・折口信夫・正岡子規・本居宣長・秀吉の妻ねね・伊藤若冲・空也上人等、その他にも沢山の方々がおみえになります。尚、善入院檀信徒の方々は色々な職業(土木・建築・電気・水道等々)に携わって見えます。又、青少年の徳育には寺子供塾を開いております。ご相談・ご利用下さい